

源氏物語における「たり」「り」の文末用法

—— 係り結びの使用頻度と文体差との関連をめぐって ——

西 田 隆 政

The Usage of Sentence Endings in *tari* and *ri* in the *Tale of Genji*

—— On the Relationship between the Frequency of Use of *Kakarimusubi* and the Difference of Styles ——

Takamasa Nishida

Abstract : *Tari* and *ri*, which are auxiliary verbs of the tense aspect system, are examined as they appear in the *Tale of Genji* in relation to the usage of sentence endings, while comparing them with *ki*, *tsu* and *nu*. It is consequently shown that the tendency is to use *tari* and *ri* in a similar way to the use of *tsu* and *nu*, which have few examples of coincidence with *kakari-joshi* in narrative sentences and whose examples of coincidence with *kakari-joshi namu* increase in conversational sentences. The tendency of their use is clearly different from *keri*, which has many examples of coincidence with *kakari-joshi* in both narrative sentences and conversation. Therefore, it is thought that *tari*, *ri*, *tsu* and *nu* have a different function from *keri* in the deployment of the text of a tale.

要旨 : 源氏物語における、テンス・アスペクト系の助動詞「たり」「り」について、「き」「けり」「つ」「ぬ」と比較しつつ、その文末用法を検討した。その結果、「たり」「り」は、地の文において係助詞と共起する例がすくなく、会話文において係助詞「なむ」との共起例がふえるという、「つ」「ぬ」と類似の使用傾向をしめした。これは、地の文、会話文ともに係助詞との共起例がおおくをしめる「けり」とは、あきらかにことなった使用傾向である。このことは、「たり」「り」「つ」「ぬ」が、物語のテキストの展開上、「けり」とはことなった機能をもつことにもつながるとかんがえられるのである。

1 はじめに

いわゆる過去・完了の助動詞とされる、「き」「けり」「つ」「ぬ」「たり」「り」は、平安時代の和文において、テンス・アスペクトをになう助動詞として、多用されている。さらに、これらが物語テキストの展開上にも重要な役割を有していることも、共通理解となっているとおもわれる¹⁾。

また、これらの助動詞は、係り結びの連体形終止の結びとしても使用される。それは、終止形終止とはお

のずとちがった機能を、テキスト上ではたしているとかんがえられる。

今回の考察では、以前におこなった、源氏物語での「つ」「ぬ」の調査結果²⁾をふまえて、「たり」「り」の使用状況について、「けり」とも比較しつつ、検討していくことにする。

2 文末用法と係り結び

まず、6の助動詞の文末用法の例を、活用形と地の文・会話文等の使用文体（以下、文体とする）のちが

表1 「たり」

	たり	たる	たれ	合計
地の文	642	27	0	669
会話文	26	28	4	58
心話文	25	21	1	47
消息文	1	3	0	4
和歌	0	2	1	3
合計	694	81	6	781

表2 「り」

	り	る	れ	合計
地の文	921	60	0	981
会話文	21	25	6	52
心話文	7	16	0	23
消息文	0	0	0	0
和歌	0	8	0	8
合計	949	109	6	1064

表3 「つ」

	つ	つる	つれ	合計
地の文	102	2	0	104
会話文	11	58	52	121
心話文	6	4	1	11
消息文	0	0	0	0
和歌	2	3	0	4
合計	121	67	53	241

表4 「ぬ」

	ぬ	ぬる	ぬれ	合計
地の文	522	11	0	533
会話文	46	37	6	89
心話文	10	3	1	14
消息文	2	3	0	5
和歌	7	5	0	12
合計	587	59	7	653

表5 「けり」

	けり	ける	けれ	合計
地の文	356	492	0	848
会話文	57	104	82	243
心話文	65	33	18	116
消息文	0	1	0	1
和歌	6	12	4	22
合計	484	642	104	1230

表6 「き」

	き	し	しか	合計
地の文	7	6	1	14
会話文	40	115	32	187
心話文	1	17	0	18
消息文	0	3	0	3
和歌	9	9	0	18
合計	57	150	33	240

いに着目して、数値化した表をしめす³⁾。なお、これらの表の数値には、「たりぬ」「にけり」等の複合形式をふくまない。また、「きかし」「つるぞ」等の助詞の下接した例、「てよ」等の命令形の例もふくまない。

これらの1から6の表をみて、まず注意されるのは、文体による各活用形の使用数のちがいである。6の助動詞ともに、会話文と心話文と消息文では、連体形の使用数がおおくなる傾向がある。それに対して、地の文での例は、「き」「けり」を別にすると、終止形の使用数がほとんどをしめる。ただ、各助動詞により、数値にはかなりのばらつきがある。その点を中心に、2章以下で検討していくことにする。

3 地の文における連体形 「たる」「る」の文末用法

まず、地の文での文末用法の連体形の使用数は、

「たり」は669例中の27例で3.4%、「り」は981例中の60例で6.0%、「つ」は104例中の2例で1.9%、「ぬ」は533例中の11例で2.1%である。なお、「き」は14例中の6例で42.8%、「けり」は848例中の492例で、先の4つの助動詞とは別途考察が必要であろう。

これらの数値からすると、「たり」「り」「つ」「ぬ」は、地の文の連体形終止での使用例がすくないというのが基本傾向としていえそうである。そして、その使用例も係助詞「ぞ」との結びが大部分を占める。「たり」では26例中の25例(連体形止め⁴⁾1例)、「り」では60例中の53例(「なむ」1例、連体形止め6例)、「つ」では2例とも、「ぬ」では11例とも、が「ぞ」との結びの例である。

「たり」「り」には、「つ」「ぬ」とはちがひ、「ぞ」の結び以外の例がみられるが、これらの大部分は確例ではない。

- [資料1] 中の君も、うちすがひて、あてになまめかしょう、すみたるさまはまさりて、をかしょうおはすめれば、ただ人にてはあたらしく見せまうき御さまを、兵部卿の宮のさもおぼしたらばなどおぼしたる。(「紅梅」1448頁14行)⁵⁾
- [資料2] をかしきさまに、琴笛の道は遠う、弓をなむいとよくひける。(「東屋」1794頁11行)
- [資料3] ……尚侍の君、もののみやび深くかどめきたまへる人にて、目なれぬさまにしなしたまへる。(「若菜上」1053頁7行)
- [資料4] 明石の御方に、三の宮してきこえたまへる。／をしからぬこの身ながらもかざりとして薪つきなむことのかなしき／(「御法」1383頁14行)

資料1は、「たり」の唯一の例で、連体形止め⁶⁾の例であるが、河内本系・別本系のテキストでは、終止形「たり」となっており、疑問のこのる例である。資料2は、「り」の「なむ」との結びの例で、いわゆる完了系の助動詞で地の文唯一の「なむ」の結びのようなのであるが、大島本以外の青表紙系諸本では「ひきける」とあり、現行の注釈書類もそのように校訂している。資料3も同様で、青表紙系諸本が「たまへり」で注釈書類も校訂している。他にも1例同様の例がある。資料4は、「三の宮經由でおつたえなさった」「をしからぬ」の歌という、地の文から歌へ接続する例で、「る」で終止する他の連体形止めとは性格のちがう例である。

これらからすると、「ぞ」の結び以外の例は、「り」の連体形止め2例だけということになる。地の文での、これら4の助動詞の連体形終止は「ぞ」の結びとしての少数例がみられるのみで、原則として、終止形終止で用いられるものとかがえられる。

ただ、「たり」「り」では、「つ」「ぬ」よりも、その「ぞ」との結びの例が比較的多くみられる。そこで、終止形終止と連体形終止の両方の例がある動詞の例で、その点を検討する。

- [資料5] 少納言ぞきこえたる。「とはせたまへるは、今日をもすぐしがたげなるさまにて、……」とあり。(「若紫」179頁8行)
- [資料6] 日たけてぞもてまゐれる。紫のこまやかなる紙すくよかにて、小少将ぞ例のきこえたる。ただ、おなじさまに、かひなきよしをかきて、「いとほしさに、かのあ

りつる御文に、手習すさびたまへるをぬすみたる」とて、中にひきやりて、いれたり。(「夕霧」1350頁10行)

- [資料7] 行幸ちかくなりて、試楽などののしるころぞ、命婦はまゐれる。(「末摘花」217頁5行)
- [資料8] 子の筑前の守ぞまゐれる。(「須磨」426頁2行)

資料5と6は「きこえたる」の例である。「きこえたり」が18例なのに対して、「きこえたる」はこの2例である。資料5も6も、ともに「きこえたる」の動作主体が係助詞「ぞ」で卓立されている⁶⁾。それに対して、「きこえたり」は、「……まことになむときこえたり」(「夕顔」142頁1行)のように、18例中の16例が会話文等を引用する例である。動詞「きこゆ+たり」の場合、動作主体を卓立して強調する場合にかざり、「きこえたる」がもちいられていることになる。

資料7と8は「まゐれる」の例である。「まゐれり」が19例で「まゐれる」が5例⁷⁾である。資料7は「ぞ」による動作の行われた時節の卓立、資料8は同じく動作主体の卓立で、ほかに、時節が1例、動作主体が1例、出発地が1例となる。いずれも、「まゐれる」という動作がなされる際に、卓立して強調される必要のある事柄が「ぞ」によってしめされている。「日くれて惟光まゐれり」(「夕顔」131頁4行)のように、時節も動作主体も卓立する必要のない場合は「まゐれり」となる。

また、係り結びでの例のある動詞を調査すると、「たり」は、「あゆむ」「いでく」「うちゑむ」「おきみる」「おはす」「おぼす」(3例)「おもふ」「かく(書)」「かへる」「きあふ」「きこゆ」(2例)「く」(2例)「さしいる」「す」「そふ」「たてまつる」「のこる」「ふす」「みゆ」(2例)「もてく」「ひらく」の21種26例である。基本的に動作動詞が多く、移動動詞や思考動詞も目につく。ただ、状態性の動詞は「のこる」だけである。

「り」では、「おもふ」(3例)「しあふ」「つかうまつる」「のたまふ」「まさる」「まゐる」(5例)「もてまゐる」「たまへる」(40例)の8種53例である。「たまへる」の上接動詞は、「あまる」「いづ」「いはひきこゆ」「うらむ」「おこたる」「おほゆ」「おもふ」「おもひかはす」「おもひきこゆ」「かかる」「かく」(2例)「ききみる」「さしのぞく」「す」(5例)「すぐる」「すみなす」「そひたてまつる」「たてまつる」「対面す」「つかうまつる」「のぼる」「はひいづ」「まうく」

「まさる」「まもりゐる」「まゐる」「みゆ」「みる」「みつく」「わたる」(6 例)で、30 種 40 例である。「たり」と同様に、動作動詞が多く、移動動詞や思考動詞もみられる。

これらの動詞での使用例は、叙述の上で、卓立して強調すべき動作主体や時節や行為の場所等がありえ、その際に「ぞ」が使用されている。そして、先に検討した「つ」「ぬ」のむすびと比較すると、使用例がおおいだけでなく、その上接動詞の種類も多様である。それに対して、「つる」の 2 例は存疑例で、「ぬる」も 11 例にすぎない*。

地の文での「たり」「り」の連体形終止の例は、係助詞「ぞ」との使用例はあるものの「なむ」との使用例がないという基本的な傾向は、「つ」「ぬ」に通じる。ただ、「たり」「り」に「ぞ」の使用例の比較のおおい点でことになっている。しかし、「けり」が、地の文でも連体形終止の例が終止形終止の例よりもおおく、「ぞ」「なむ」両方のむすびの例があるのはことになった傾向という点で、「たり」「り」「つ」「ぬ」は共通するのである。

4 会話文等における連体形「たる」「る」の文末用法

3 章では、地の文での使用傾向をみたが、次に地の文以外の用法を検討する。物語における引用文である会話文と心話文を中心にみていく。これらにおける連体形終止の用法は下の表 7 から表 10 にしめた。文体ごとに、共起する係助詞や不定詞によってあげた。

表 7 「たり」

	会話	心話	消息	和歌	合計
ぞ	3	1	0	1	5
なむ	12	1	1	0	14
や	0	0	0	1	1
いかが	0	1	0	0	1
たれか	2	0	0	0	2
なぞ	1	0	0	0	1
など	1	0	0	0	1
なにか	1	0	0	0	1
連体形止め	8	18	2	0	28
合計	28	21	3	2	64

表 8 「り」

	会話	心話	消息	和歌	合計
ぞ	2	1	0	5	8
なむ	10	1	0	0	11
や	0	0	0	1	1
やは	2	1	0	0	3
いかが	0	1	0	0	1
いかで	0	1	0	0	1
いかなる	1	0	0	0	1
などか	4	0	0	0	4
なに	1	0	0	0	1
なにごとかは	1	0	0	0	1
連体形止め	4	11	0	2	17
合計	25	16	0	8	49

まず、会話文の傾向から検討する。文末用法中の連体形終止の比率は、「たり」が 58 例中の 28 例で 48.3%、「り」が 52 例中の 25 例で 48.1%、「つ」が 121 例中の 58 例で 47.9%、「ぬ」が 89 例中の 37 例で 41.6%、「けり」が 243 例中の 104 例で 43.0%、「き」が 187 例中の 115 例で 61.5% である。地の文と比較すると、「けり」「き」以外は、地の文ですくなくった連体形終止の比率が、会話文で極端におおくなる。なお、「き」のみが 6 割台となるのは、已然形終止の例がすくないことによる。

次に、会話文での共起する係助詞等の使用傾向をみる。地の文と比較して一番の相違点は、係助詞「なむ」の使用例の目につくことである。地の文では「り」に 1 例の存疑例があるのみであったが、「たり」「り」「つ」「ぬ」とも、もっとも使用例がおおくなる。「たり」は 28 例中の 12 例で 42.9%、「り」は 25 例中の 10 例で 40.0%、「つ」は 58 例中の 31 例で 53.4%、「ぬ」は 37 例中の 22 例で 59.5% である。それに対して、「ぞ」の例は少数となる。また、不定詞と共起する例もおおく、連体形止めの例も目だつ。

「なむ」の使用例がおおいは、会話文という相手に対してはたらきかける要素のつよい文体である点に関係するとかんがえられる。宮坂 (1952) によれば、おなじ係助詞でも、「ぞ」と「なむ」には、「<なむ>は語る強調、<ぞ>は写す強調」のちがいがあるとされる。また、阪倉 (1993) でも、「『ぞ』は話し手自らにおいて筋を通して述べるという態度を示すものであった」のに対して、「『なむ』は会話文によく用いられて、相手に説明する態度を強く示すものであった」と

表9 「つ」

	会話	心話	消息	和歌	合計
ぞ	0	0	0	2	2
なむ	31	0	0	0	31
や	2	0	0	1	3
か	1	0	0	0	1
やは	1	0	0	0	1
いか	1	0	0	0	1
いかやう~か	1	0	0	0	1
など	1	0	0	0	1
などか	1	0	0	0	1
連体形止め	19	4	0	0	22
合計	58	4	0	3	65

表10 「ぬ」

	会話	心話	消息	和歌	合計
ぞ	2	0	0	2	4
なむ	22	0	3	0	25
や	2	0	0	1	3
か	2	0	0	0	2
やは	1	0	0	0	1
いか	2	0	0	1	3
連体形止め	6	3	0	1	10
合計	37	3	3	5	48

される⁹⁾。「ぞ」が事件や心情を客観的にしめす方向であったのに対して、「なむ」はより「話し手」の「聞き手」への説得的な配慮のしめされる係助詞であったことによるのであろう。この調査結果も、それらの説に合致するのである。

ついで、使用例のおおいは、連体形止めの例である。古典文、特に平安朝仮名散文の連体形止めの位置づけについては、諸説提起されているが、阪倉(1993)の指摘するように、実際の運用という側面からすると、終止形での終止とはちがった、説明的な効果をもつものであり、基本的に係り結びと同様の効果をもつものとかがえられる¹⁰⁾。

〔資料9〕ただ、「ゆくへもしらず、少納言ゐてかくしきこえたる」とのみきこえさするに、宮もいふかひなうおぼして、……(「若紫」194頁6行)

〔資料10〕よびよせて、「たがぞ」ととへば、「殿の冠者の君のしかじかのたまうてたまへる」といへば、……(「少女」700頁3行)

資料9は、若紫をひきとりにきた、父親の式部卿宮は、行方不明になったのは女房の少納言が彼女をどこかへつれていったからというのをきいた例である。この文では、「少納言がつれて(どこかへ)おかくしした」ということがのべられているが、それだけでなく、その事実を父親に提示して説明しようとしている文とかがえられる。事実を事実としてのべるだけでなく、「聞き手」への配慮がみられるのである。資料10も同様で、上位者である父親の惟光の質問に対する息子の回答ということで、説明的な文であることはあきらかであろう。

また、連体形止めは、心話文においては、その使用例の大部分をしめる。その文としての機能は、会話文と同様のものである。

〔資料11〕君は、なにごころもなくねたまへるを、いだきおどろかしたまふに、おどろきて、宮の御むかへにおはしたると、ねおびれておぼしたり。(「若紫」190頁2行)

資料11は、光源氏が若紫をむかえにきた際に、彼女が父親の式部卿宮がむかえにいらしたとねほけておもったという例である。心話文では、「聞き手」は自分自身なので、彼女はおこされてしまった事態を、自分に理由づけて納得させようとしているとかがえられる。心話文では、事態を自分の内部で位置づけて理解しようとするために、係り結びによる卓立しての強調よりも、自身に対して説明的にのべる形式が多用されるのであろう。

以上、会話文の例を中心に検討してきた。そこから理解されるのは、文末用法における、地の文との相違である。地の文では終止形終止を基本としていたのに対して、会話文や心話文では連体形終止の使用例が比率をましている。それだけでなく、地の文では大部分が「ぞ」の結びの例であるのに対して、会話文や心話文では「なむ」の例や不定詞共起例や連体形止めの例など、多様な終止の形式が存在する。

この点からすると、源氏物語をはじめとする、平安朝の和文において、助動詞の使用傾向については、地の文とそれ以外という、文体による差異に注意する必要があることになる。地の文では、物語中の事態における、動作等のありようをしめすのが主要な機能である。それに対して、会話文では、その事態をいかに相

手につたえるのかという、話し手と聞き手の関係にかかわる側面が重視される文での使用例がおおいのである。

係り結びの使用が、このような話し手と聞き手の問題にかかわる可能性があるとする、その係り結びが地の文でも多用される「けり」との関連で、「たり」「り」の用法について、検討する必要がある。5章では、その点を物語テキストの問題とともにみていくことにしたい。

5 物語テキストでの「たり」「り」の文末用法

物語のテキストでの「けり」の機能については、竹取物語での阪倉（1956）の指摘以来、物語の章の区切りに密接にかかわるものとの共通理解があるとおもわれる¹¹。

「けり」を以て終止する文は、主としてこの物語の前半に多く表れ、かつ、それらは幾つかの場所に集中して用いられる傾向がある。そして、その群をなして用いられる場所というのは、大体、かの大秀が『竹取物語解』において立てた九つの章の切れ目、相当することを知らるのである。（阪倉 1956）

また、源氏物語についても、「いづれの御ときにか」からはじまる冒頭文が「けり」で終止するように、基本的には「けり」が物語テキストでの語りをになうものであるとかがえられている¹²。ただ、長編の作品ゆえに、その他にも、さまざまな要素が作品構成上に機能しており、その一端については、拙稿でもいくつかふれたところである¹³。

助動詞においても、「けり」だけでなく、「ぬ」にも物語の構成上、重要な区切れをしめすものとなっている例がある¹⁴。

〔資料 12〕 にはかに所せうて、みづからはこのたびえまうでたまはず、ことなる御逍遥もなく、いそぎいりぬ。二条院におはしましつきて、都の人も、御供の人も、夢のこちして、いきあひ、よろこびなきもゆゆしきまでたちさわぎたり。（「明石」475 頁 6 行）

資料 12 では、明石から都にむかった光源氏一行が、いそいで京にはいった、そして、二条院に到着してと、つづいている。ここでは、「いそぎいりぬ」の部分で、一行が「はいる」動作を終結して、その結果、物語の中で場面が変わり、つぎの二条院での事態

がつづいていく。このような移動をしめす動詞と「ぬ」がもちいられると、そこで物語の焦点となっている人物の移動動作が終結することで、移動後の場面へと物語の場が転換していく。鈴木（1999）では、このような場合、「ぬ」が「場面とじ」の機能をもつとされる¹⁵。また、物語のながれからみると、場面転換の徴標となっているとみることもできよう。

一方、「たり」「り」については、「場面おこし」の例のあることが、鈴木（1999）により指摘されている¹⁶。

〔資料 13〕 兵部卿宮もつねにわたりたまひつつ、御あそびなどもかしようおはする宮なれば、いまめかしき御あはひどもなり。そのころ、尚侍の君まかでたまへり。（「賢木」374 頁 13 行）

資料 13 はそこであげられた 1 例であるが、朧月夜の尚侍が自分の里へとさがるという移動動作の終結が、次の場面をみちびいている例とされる。直前に不遇の光源氏と螢兵部卿宮との交友の件がかたられ、それから一転して、尚侍退出の件となり、この例では、段落構成上の区画をしめす「そのころ」がもちいられるのも、それを補強している。

これらの点からすると、源氏物語の地の文では、「けり」以外のテンス・アスペクト系の助動詞にも、何らかの場面の転換に密接にかかわる場合のあるのは、あきらかである。ただ、それらの機能は、やはり「けり」のもつ機能とはちがっているとかがえられる。

〔資料 14〕 はかなきひとくだりの御かへりのたまさかなりしも、たえはてにたり。七月になりてぞ、まゐりたまひける。めづらいうあはれにて、いとどしき御おもひのほどかぎりなし。すこし、ふくらかになりたまひて、うちなやみ、おもやせたまへる、はた、げにるものなくめでたし。（「若紫」176 頁 6 行）

光源氏は、藤壺が自分の子を懐妊したのではと思いつながらぬ、仲介役女房の王命婦との手紙のやりとりもかなわない、とあってから、7月になって、藤壺が参内したとつづく。この直後に、藤壺への桐壺帝のおもいがのべられていることからすると、「まゐりたまへる」とあっても、「場面おこし」の例として理解されうところである。しかし、ここで「けり」は、移動動作の終結をしめすだけではないようにおもわれる。

〔資料 15〕 「このごろわづらひたまふことよろしく

は、このごろすぐして、京の殿にわたりたまひてなむ、きこえさすべき」とあるを、こころもとなうおほす。藤壺の宮、なやみたまふことありて、まかだたまへり。(「若紫」173頁9行)

資料15は、資料14の前に、藤壺が里さがりする例である。ここでも、直前で光源氏が若紫つきの女房とのやりとりの進展しないのを不安がっているとあって、藤壺の話となっている。場面の転換があるという点では、資料14と同様である。しかし、資料15では、その移動動作が終結してから、光源氏が密会すべく画策するとつづき、動作の終結で主体である藤壺が移動したこと自体が、つぎの物語の展開へとつながっている。

それに対して、資料14では、物語でそういう事態が生起したということのをべるだけでなく、その後には、解説的な叙述がつづいている。帝の思い、さらには、藤壺の様子と、物語での事態の進展というよりも、物語の状況の説明がおこなわれる。これは、いわゆる、「けり」の語りの機能にもむすびつくともおまわれる。そこで注目すべき事態をあらわす文が、「けり」によってしめされる。語り手の口調もふくめて、「～なのだった」とも理解されるものである。

また、「七月になりてぞ」と、その時点が係助詞で卓立してしめされる点も注意すべきである。ここまでみてきたように、「つ」「ぬ」「たり」「り」は、地の文では係助詞と共起することが非常にすくないのであるが、「けり」では、そのような例が多数みられる¹⁷⁾。このことも、「けり」が物語の事態を単にしめすにとどまらず、それを他の文中の要素と関連づけていくことで、叙述上の注目点を提起していることにもなるであろう。

とすると、「けり」と「たり」「り」や「つ」「ぬ」とは、物語地の文の叙述においては、あきらかにことなる機能を有しているのではないかとかんがえられる。助動詞そのもののもつ意味という側面だけでなく、その文中でのもちいられ方、とりわけ係り結びの使用頻度からみても、その相違点はでていとみられるのである。

6 ま と め

ここで、もう一度、各助動詞の係り結びの使用傾向を整理して、列挙してみる。

1 「たり」「り」「つ」「ぬ」は地の文で「ぞ」によ

る結びの例が少数みられる。

2 「たり」「り」は「つ」「ぬ」にない地の文での連体形止めの例が少数みられる。

3 「たり」「り」「つ」「ぬ」は会話文等で連体形終止の比率がたかくなる。

4 「たり」「り」「つ」「ぬ」は会話文で「なむ」の結びの例がおおい。

5 「たり」「り」「つ」「ぬ」は会話文で「ぞ」の結びの例がすくない。

6 「たり」「り」「つ」「ぬ」は会話文で不定詞との共起例がみられる。

7 「たり」「り」「つ」「ぬ」は地の文で連体形終止の使用比率が「けり」とはことなり、非常にすくない。

以上のような、傾向がみてとれるかとおもう。「たり」「り」「つ」「ぬ」は、とりわけ7の地の文での使用傾向で、係り結びをふくめた連体形終止の使用比率で、「けり」とはちがいをしめしている。この点は、これらの助動詞の機能をかんがえる際に、おおきな意味をもつとかんがえられるのである。

なお、「けり」「き」の会話文等での使用傾向についても、地の文以上の連体形終止の使用比率をしめすという興味ぶかい問題があるが、この点については、今後の課題としたい。

注

※本稿は、第25回中部日本・日本語学研究会(2000年5月6日、刈谷市立産業振興館)での発表「源氏物語における「たり」「り」の文末用法」をもとに、一部構想をあらためて、成稿したものである。研究会の際に、ご教示いただいた、出席者の皆様には、あつく御礼申しあげる。

1) 近年では、鈴木(1999)が、これら助動詞のテンス・アスペクト上の意味から、物語の場面展開について論じている。

2) 西田(2000)の調査による。

3) 上田英代他編(1996)によって調査した。

4) 「連体形止め」は、係助詞も不定詞もなく連体形で終止している例をさす意味でもちいている。「連体形終止」と区別するためである。

5) 源氏物語の引用は池田(1953)によりその頁数行数をしめた。引用に際して、適宜、かなづかいをあらため、清濁をほどこし、漢字をあて、句読点をつけた。

6) 「卓立」による強調については近藤(2000)にくわしい。

7) 「まゐれる」には「もてまゐれる」1例・「まゐりたまへる」1例をふくむ。

8) 西田(2000)の調査による。

- 9) 阪倉 (1993) の236頁による。
- 10) 阪倉 (1993) の234頁による。
- 11) 1例をあげれば、塚原 (1987) では、助動詞「けり」に着目しての、竹取物語、伊勢物語の詳細な作品構成の検討がおこなわれている。
- 12) 塚原 (1982) では、源氏物語全編の構成が、助動詞「けり」によるとしている。
- 13) 西田 (1999 a) (1999 b) (1999 c) (2001 a) (2001 b) で検討をおこなった。
- 14) 西田 (1993) (1996) (1998) による。
- 15) 鈴木 (1999) の221~222頁による。
- 16) 鈴木 (1999) の158頁による。
- 17) 鈴木 (1999) の169頁にも指摘がある。

参考文献

- 池田亀鑑 1953『源氏物語大成校異篇1~3』(中央公論社・調査は9版による)
- 上田英代・村上征勝・今西祐一郎・樺島忠夫・藤田真理・上田裕一共編 1996『源氏物語語彙用例総索引 付属語篇1~5』(勉誠社)
- 尾上圭介 1982「文の基本構成・史的展開」(『講座日本語学2』明治書院)
- 川端善明 1982「動詞活用の史的展開」(『講座日本語学2』明治書院)
- 小池清治 1967「連体形終止法の表現効果—源氏物語・今昔物語集を中心に—」(『言語と文芸』54)
- 近藤泰弘 2000『日本語記述文法の理論』(ひつじ書房)
- 阪倉篤義 1956「竹取物語の構成と文章」(『国語国文』25-11, 後『文章と表現』(角川書店, 1975) 所収)
- 1993『日本語表現の流れ』(岩波書店)
- 鈴木 泰 1995「メノマエ性と視点(I)—移動動詞の〜タリ・リ形と〜ツ・ヌ形のちがひ—」(『築島博士古稀記念国語学論集』汲古書院)
- 1999『改訂版古代日本語助動詞のテンスとアスペクト—源氏物語の分析—』(ひつじ書房・1992初版)
- 竹岡正夫 1963「助動詞「けり」の本義と機能—源氏物語・紫式部日記・枕草子を資料として—」(『言語と文芸』31)
- 塚原鉄雄 1982「源語各帖の冒頭表現—源氏物語の作品構成—」(『源氏物語の探求第7輯』風間書房)
- 1987『王朝初期の散文構成』(笠間書院)
- 仁田義雄 1984「係結びについて」(『研究資料日本文法』⑤) 明治書院)
- 宮坂和江 1952「係り結びの表現価値—物語文章論より見たる—」(『国語と国文学』29-2)
- 山口佳紀 1987「各活用形の機能」(『国文法講座2』明治書院)
- 山田孝雄 1907『日本文法論』(宝文館)
- 西田隆政 1993「源語須磨の表現構成—助動詞「ぬ」による段落構成—」(『中古文学』51)
- 1996「源氏物語葵の巻の段落構成」(『大分大学教育学部研究紀要』18-2)
- 1998「源氏物語における対偶構成の巻々(3)—明石の巻を中心に—」(『大分大学教育学部研究紀要』20-2)
- 1999 a「指示語「かくて」と源氏物語の段落構成」(『国語語彙史の研究18』和泉書院)
- 1999 b「源氏物語の段落構成と「そ」系の指示語—「そのころ」「その年」「その日」「その夜」をめぐって」(『大阪市立大学文学部創立50周年記念国語国文学論集』和泉書院)
- 1999 c「源氏物語の段落構成と「か」系の指示語—「かく」「かう」を中心に—」(『井手至先生古稀記念論文集 国語国文学藻』和泉書院)
- 1999 d「源氏物語における助動詞「ぬ」の文末用法—場面起こしと場面閉じをめぐって—」(『文学史研究』40)
- 2000「助動詞「つ」「ぬ」と係り結び—源氏物語を中心に—」(『表現研究』71)
- 2001 a「源氏物語における指示語「さて」の用法—平安和文での接続詞的用法の展開をめぐって—」(『国語語彙史の研究20』和泉書院)
- 2001 b「源氏物語の段落構成と指示語「かの」」(『筑紫語学論叢』風間書房)